
英雄

南高陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄

【Nコード】

N6670Y

【作者名】

南高陽介

【あらすじ】

科学の進歩、それは新たな脅威を生み出す。

アフリカにおける米中の代理戦争にBSC(Bio Science Creature)と呼ばれる生命兵器が導入される。戦果を挙げるものの、非人道性と生命倫理を無視した行為のために国連で禁止された。これに反発した科学者がBSCを逃がし、世界各地に出現するようになる。

被害を食い止めるため国連は世界防災連合(WDU)を組織し、その実働部隊として防災特殊部隊(DTF)を各地に創設した。

これは、人類の平和を守る彼らの物語

プロローグ（前書き）

初投稿です。拙筆で申し訳なくなります。
書き表し方、基本、ルール等早めに覚えるのでご容赦下さい……。

プロローグ

2055年 アフリカ 某所

アフリカの雄大なる大地に日が沈もうというとき、一人の若者が煙草に火をつけ写真を眺めていた。

「あと4日で帰れる」

故郷の地へ思いを馳せながら、煙を吐くように呟いた。そのとき、けたたましい警報が鳴り響き、スピーカーが叫んだ。

「総員第1種戦闘配置」

若者は、すぐさま銃を担いで走り出した。

銃声が鳴り響き、人の怒号と悲鳴が飛び交う。

「全然効いてないぞ、この化け物！」

「駐営地は放棄、直ちに撤退する。集結点はB－3だ走れ！」

隊長の指示が飛んだ。

若者は全力で走りだした。

（こんなところで、死ぬわけにはいかない）

その瞬間、強い衝撃を受け宙を舞い、地面に叩きつけられていた。

「もう駄目か」

薄れゆく意識の中で、巨大な黒い影が迫ってくるのが分かった。

「ごめん……」

意識は深い闇の中へと消えていった。

1. 新たなる脅威（前書き）

人が人であるうちは必ず過ちを繰り返す……

1. 新たなる脅威

2060年 夏 災害特殊部隊（DTF）日本支部作戦室

「本部の偵察船が太平洋上で大型の漁影を確認、第1種監視対象として警戒せよとのことです」

オペレーター白木のよどみのないはっきりとした声が作戦室に響く。

「奴さん久しぶりに現れたな。腕になるぜ」

「あんた本当デリカシーないわね、馬鹿じゃないの。」

「馬鹿……って、おい！」

「南野、北見、二人ともその辺にしとけ。」

副隊長の西村がたしなめる。

「すみません！」

「はい……すみません。」

一応の謝罪の後、すぐに小声で喧嘩を始める。そんな様子を見て苦笑しながら西村が尋ねる。

「隊長、どうしますか？」

隊長と呼ばれた男は、腕を組んだまま微動だにしない。

やがて、まくし立てるように口を開いた。

「監視対象の捕捉を早急に行う。初代と仲里が戻り次第調査に向かう。白木、太平洋沿岸の自治体に遊泳禁止措置の通達を頼む。」

それだけ言うと銅像のように沈黙する。

(テンパってるな……)

西村は微笑んでいた。

＊

千葉県九十九里海水浴場

地球温暖化が進み、最高気温が関東でも40度を近くなることは
ざらである。

そのおかげで各地の海水浴場は盛況となっている。

「現在、太平洋沿岸一帯に怪獣注意報が発令されました。海から上
がって下さい。」

市の広報車からやる気のなさそうな声がスピーカーから聞こえる。

「まったく、注意報だして何もなかったら文句言われるの俺達なん
すよ」

「まあまあ、何かあってからじゃ責任取れないしな」

「普通誰も従わないですよ」

ほとんどの場合、注意報が出ても何も起きない。このようなことが、
人間の警戒心を緩めていくのだ。

「何だあれ？」

一人の海水浴客が異変に気がついた。海の一部が異様に盛り上がっているのだ。

そしてそれは、こちらへと近づいて来ている。

衝撃は車に乗っていても分かる程大きなものであった。

慌てて車から降りた市の職員が見た光景はこの世のものとは思えないものだった。隊長40mはあろうかという鰐が人を襲い、逃げ惑う人々であたりは騒然としている。

「何だよ……これ」

二人は呆然と立ち尽くすしかなかった。

やがてあたりは何事もなかったかのように静まり返り、聞こえるのは波の音だけであった。

1-2 新たなる脅威

D T F 作戦室

「千葉県九十九里海水浴場でB S Cが出現したとの通報がありました」

作戦室の空気が真夏であるのにもかかわらず凍りついた

「被害状況は？」

東山の鋭い声が飛ぶ。白木は困ったような顔をしながら答えた。

「不確定情報ではありますが、死亡者は30名を越えているのではないかということです」

「おい！嘘だろ！過去そこまでの被害が出たことなんてないぞ」

「落ち着け！まだ確定情報じゃない」

西村も南野を宥めたものの焦りは隠しきれていない。これと対象的に、北見は驚くほど冷静だった。

「初代と仲里を待つ猶予はありませんね」

「そうだな。西村、南野、北見は直ちに現地へ向かってくれ。それと、重火器の使用を許可する」

東山の決断は驚くべきものである。

重火器の使用は緊急時と通常装備で対応ができないときの特別措置で、支部長の許可が必要となっているからだ。

「了解！」

3人は作戦室を飛び出した。

＊

千葉県九十九里海水浴場

血で赤く染まった砂浜、押し潰された人間の遺体、転がる肉片、現場はまさしく地獄絵図であった。

駆け付けた警察官達もあまりの惨状に何もできないでいた。

そこへ一台の車が走り込む。黄色の車体に黒のライン、赤字でDTFが書かれた特殊戦闘車両である。

濃紺の戦闘服を着た3人が車から降りてきた。通常、調査の場合スーツ型の制服を着用する。重火器の許可といい事態の深刻さが窺える。

「ご苦労様です。千葉県警の豊橋です」

「DTFの西村です。早速ですが状況は？」

「詳しい状況は不明です。今、お話を伺っているところです」

「使えないわね」

北見が聞こえる程度に呟く。

「言いたいことがあるならばっきりお願いしたいもんです」

「じゃあ言うわ。事件発生から30分も……」

言い終わらないうちに南野が遮って、後ろに引っ張っていく。

「突っ掛かるのはやめろ。どうみても所轄の警察官が対処できる状況じゃないだろ」

「警察出身だからって肩持つのはやめなさいよ」

「それは関係ない。お前冷静に見えてそうでもないんだな」

しばらく言い合いをしていると

「そろそろいいよね？」

顔は笑っているが、西村は有無を言わせない口調である。2人は反論する余地すらなかった。

「南野君は現場にいた人に話を聴いてきてくれ、北見さんは僕と調査。以上」

「了解」

2人は同時に返事をした。

＊

被害者達は海の近くにあるホテルに集められていた。南野は一人一人話を聴いていった。

（情報は大きな鰐ってことくらいか）

現場に戻ろうとしたとき、若い女性が声をかけてきた

「あの……これ」

そういいながら多機能端末を差し出している。

「録ったの？」

女性は小さく頷いた。

「ありがとう！ちょっと借りるね」

務めて明るく振る舞った。端末を受け取り、ホテルをあとにした。

「こちら、南野。本部応答願います。」

『こちら、本部の白木です。どうぞ』

「映像を手に入れたので、そちらで解析お願いします」

『わかりました。転送してください』

＊

現場に残った2人は調査を始める。

「酷いですね。早めに遺体を収容してもらった方が……」

「そうだね。BSCがいらない以上僕たちにできることは限られるからね」

「私……BSCだけでも許せないんです」

「それは隊員として？それとも個人の意見？」

北見はまるで聞こえていないかのような顔をしている。

「答えたくないなら構わないよ。ただ、復讐という気持ちに縛られるのはあまり感心できないよ」

「私の気持ちなんてわからないわ」

今度は絶対に聞こえない声で呟いていた。

＊

D T F 作戦室

「全員集まったな。白木始めてくれ。」

「はい。南野さんが送ってくれた映像を解析しました。これを見て下さい」

大型のスクリーンに人が逃げ惑う映像が映される。

「逃げ惑う人だけかと思われませんがここを見て下さい」

白木がポインターで示した場所に全員が注目する。そして、白木がキーボードで何か操作をするとその部分が鮮明となった。

「尻尾だ！」

初代が指摘する。

「そうです。海に潜るところを映したようです。これをアーカイブと照合したところ該当B S Cがいました」

クリックすると、画面が鰐のようなB S Cの画像に切り替わる。

『識別コードU S A－F 0 9』

B S Cにおけるコードには意味があり、創造国、種別、創造番号を表している。今回の場合だとアメリカ魚型の9番目ということになる。

「非常に凶暴で肉食、魚型ですから水中を高速で泳ぐことも可能です。あと、皮膚が非常に硬いという特徴もあります」

白木の説明に、みんなため息をつくしかなかった。

「それにしても、今までどうして被害が出なかったんでしょうか？」

仲里の疑問は的を得ていた。今回のBSCは今までに目撃情報すらないのである。

「確かに気になるところではあるけど、対策を先に練ろう。弱点は記載されてる？」

西村の客観的な意見が入る。DTFはBSCの殲滅が最優先となっているからだ。

「はい。魚の特徴を加えたことでエラ呼吸となっているようで、陸上での活動は10分が限界のようです。」

「弱点と言えるか、それ」

南野は机の上に突っ伏してしまった。長い沈黙の時間が流れる。

「魚だから釣っちゃいますか」

初代の冗談で場が少し和んだ。

「釣れるわけないだろ」

「初代も馬鹿だったのね……」

「初代君まじめに考えてよ」

「それ使えるな」

「ですよね……ってええ！」

東山の思いもよらない一言に西村以外全員が度肝を抜かれた。

「よし、釣り1号作戦に決定だ」

そう言うのと作戦室を出て行ってしまった。唾然とした顔でそれを見る隊員達に

「お前ら早く慣れるんだな」

それだけ言うと、西村も席を立った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6670y/>

英雄

2011年11月21日16時19分発行